

中耕・培土と雑草防除

- ◎根の発達促進・除草・倒伏防止のため、適期に中耕・培土を2回実施しましょう。
- ◎中耕・培土は、遅れないよう晴れ間を逃がさず作業を進めましょう。
- ◎湿害防止のため、中耕・培土後は速やかに畝間の溝を周囲明きよにつなぎ、地表水が速やかに排水されるよう、ほ場条件を整えましょう。
- ◎降雨の前後は、ほ場をこまめに見回って排水対策を行い、湿害を回避しましょう。

1 中耕・培土の方法

(1) 培土の時期と培土位置のめやす

中耕・培土	大豆の生育	は種後日数	培土の位置
1回目	本葉2枚目展開頃 (主茎長: 12~15cm)	20~25日頃	子葉節まで
2回目	本葉5枚目展開頃 (主茎長: <u>地際から</u> 20~30cm)	35~40日頃	初生葉節まで

(2) 作業の注意点

- ① 1回目の培土作業は梅雨が本格化する前に完了させる。
- ② 開花期以降は、根が切れると生育抑制や落花・落莢を招く恐れがあるため、開花期始め (は種後 50 日頃) までに作業を完了する。
- ③ 株元が凹むと培土の効果が発揮されないうえ、水が溜まり病害の原因となる。株元までしっかり覆うように確実に土寄せする。
- ④ 培土が高すぎると収穫ロス、汚粒発生の原因となるため、最終的な培土の高さは 15cm 程度とする。
- ⑤ 中耕・培土作業の後、スムーズに排水出来るよう畝間の溝を明きよや排水溝に速やかに連結する。

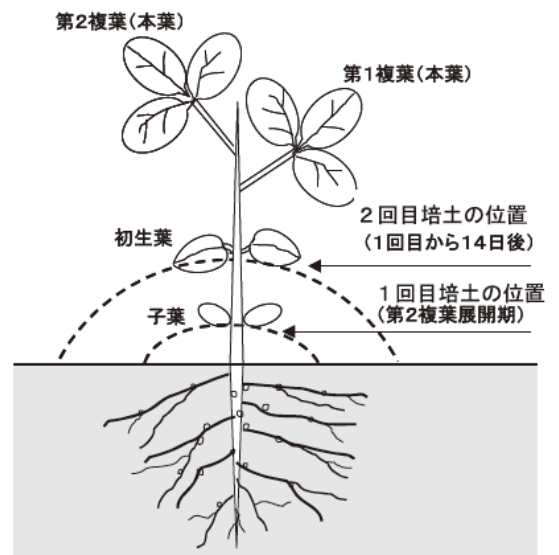


図 培土の位置

2 湿害防止 ~明きよ・暗きよの管理~

- ・降雨の前後に排水溝や明きよを点検し、排水が滞らないよう必要に応じて手直しを行う。
- ・水が溜まった場所は溝を切って明きよにつなぎ、排水を確保する。
- ・中耕・培土作業の後は、速やかにうね間を周囲明きよに連結する。
- ・表面水は1日以内でなくなるよう管理する。
- ・降雨が続く場合は湿害を防止するため、暗きよ栓を開放する。

3 追肥

- ・ 湿害により葉の黄化や生育不良の症状が見られた場合は、生育回復のために速効性肥料を追肥する。

肥料の種類	施肥量（窒素成分 kg/10a）	施用方法
速効性肥料 （硫安等）	1～3	排水対策を行った上で培土時に追肥

4 雑草防除 ～ 1回目の中耕・培土は遅れずに、2回目も確実に実施 ～

- ・ 繁茂したほ場内雑草は、大豆の生育抑制につながる上に、収穫作業の支障・汚粒の原因となるので、雑草が大きくなる前に中耕・培土を実施する。中耕・培土で雑草が抑えられない場合は生育期処理除草剤を使用する。
- ・ 茎葉処理除草剤を使用する場合は、大豆にかからないよう飛散防止カバーを使用する。雑草の生育が進むと効果が劣るため適期を逃さず散布する。また、周囲への飛散防止に十分注意する。
- ・ アサガオ類はつる化すると防除が困難となるので、残った個体は早期に抜き取りを行う。抜き取った後、ほ場に放置すると結実するため、ほ場から持ち出して処分する。



（図）株間に残ったアサガオ



（図）つる化したアサガオ

- 農薬を使用する際は、使用方法・注意事項等を必ず確認し、自己の責任において使用する。
- 農薬散布時は、周辺への飛散、使用者自身の安全に十分注意する。
- 農薬使用後は、防除歴を整理し、記録・保管する。

5 梅雨明け後の暗きよの管理と高温干ばつ時のかん水

- ・ 乾燥しやすいほ場では、夏期の水ストレスを軽減するため、暗きよ栓は閉めておく。ただし、降雨等により地下水位が急激に上昇する場合は、速やかに暗きよ栓を開放する。
- ・ 周囲が水田に囲まれる等、排水の悪いほ場では、暗きよ栓は開放したままにする。
- ・ 乾燥しやすいほ場で、7月下旬から8月下旬（開花期～さや肥大初期）に高温干ばつとなった場合は、周囲明きよを活用して畝間かん水等を行う。